

青年の境界例心性とユーモアの媒介効果

—母親の境界例心性から青年の境界例心性への影響に着目して—

渕上 美海¹・石田 弓¹

Borderline personality traits and the mediation effects of humor: The effects of maternal borderline personality traits

Masami Fuchigami · Yumi Ishida

Borderline personality traits of mothers impact those in their adolescent children. This study seeks to identify whether adolescent humor mediates this influence and whether a humorous home environment cultivates humor in adolescents. To this end, I conducted a questionnaire survey of 347 people (96 men and 251 women; M age=20.55, SD=1.30) and conducted a structural equation model based on the results. The higher the mothers' borderline personality traits that adolescents reported, the higher the adolescents' borderline traits that adolescents reported. Positive humor (one subcategory of humor) negatively impacted borderline personality traits of adolescents, while negative humor (the other humor subcategory) positively impacted it. Positive humor and a humorous home environment mediated the levels of maternal and adolescent borderline traits. Negative humor also mediated between them by increasing adolescent borderline traits. This study demonstrated the importance of humor for adolescent children of mothers with borderline personality traits.

Keywords: maternal borderline personality traits, humor, mediation effects

問題と目的

1. 非臨床群における境界例心性の特徴と境界例心性の強い母親から青年への影響

境界性パーソナリティ障害 (Borderline Personality Disorder; 以下 BPD) は、不安定な対人関係、自傷行為や自殺企図、気分の著しい変動や衝動性の高さ等によって特徴づけられるパーソナリティ障害であり、パーソナリティ障害の中でも頻繁に見受けられるものである (American Psychiatric Association, 2013)。

¹ 広島大学大学院教育学研究科

BPD の特徴を有する非臨床群は比較的多いことが示されており (Gunderson & Zanariti, 1987), その心性は境界例心性と呼ばれる。アメリカでは, 18 歳から 65 歳の非臨床群の 0.7% が BPD と診断されるほど境界例心性が強いと言われる (Torgersen, Kringlen, & Cramer, 2001)。また, Trull, Useda, Confori & Doan (1997) は, 境界例心性を有する青年は, 社会的機能において逸脱した深刻な機能障害を示すと述べている。さらに, Tragesser, Solhan, Schwartz-Mette & Trull (2007) は, 18 歳で情緒の統制ができない一群は, 2 年後に BPD と診断されるほどの症状を呈していると報告している。このように, 境界例心性の強い人々は, 長期にわたり困難を抱えており, 長期的なサポートが必要であるといえる。

一方, 非臨床群における境界例心性には BPD とは異なる一面も見受けられる。境界例心性を有する非臨床群の中には, 境界例心性に起因する様々な困難を持ちながらも, 日常生活を送ることが可能な人々もいることが示唆されている。杉野 (2013) は, 境界例心性を有しながら, 高年まで表面上の生活を送った男性の事例を提示しており, 境界例心性を持つ人々が困難を乗り越えていく強さを持っていることを示している。さらに重松 (2005) は, 境界例心性の強い大学生でも, ポジティブな内的対象を抱くことができることを示しており, 臨床群とは異なる健全さが見受けられる。

BPD 患者の家族に関しては, BPD 患者が親など家族から影響を受け, どのように症状が形成されるかということに焦点を当てた研究が多くなされてきた。Linehan (1993/2007) により生物社会理論が提唱され, BPD の治療において家族が注目されており, 家族への教育プログラムが多く開発されてきている (須川, 2014)。一方, 大家 (2006) は, 境界例心性が強い大学生は, 依存的もしくは両価的葛藤のある親子イメージを持つことを示している。また, 古川・北山 (2004) では, 境界例心性の強い大学生が, 両親の養育態度について情緒的・受容的でないと評価していると示している。さらに, 江上 (2010) では, 境界例心性と家族認知の関連について検討し, 家族機能の中でも「親密性」や「柔軟性」において負の相関関係があることを示している。しかし, これらの研究では, BPD 患者や境界例心性の強い者への支援のために家族との関係を探るといった視点のものであり, 家族が抱える困難へ焦点を当て, 家族支援を考える研究ではない。一方, BPD 患者や境界例心性をもつ人の家族の困難を考えることの重要性も認識されてきている。Weiss, Zerkowitz Feldman, Vogel, Heyman & Paris (1996) によると, BPD の母親を持つ子どもは, 他のパーソナリティ障害の母親の子どもよりも精神的な障害を持ちやすいという。また, 母親が BPD であると愛着関係を築きにくく, 子どもは情緒的・行動的問題を起こしやすいと言われている。

Herr, Hammen & Brennan (2008) では, 境界例心性の強い母親を持つ青年は, 社会的受容感と親しい友人を作る能力が低いことが指摘されている。さらに, 母親の境界例心性は, 子どもの抑うつ傾向を高めることを示している。Zalewski, Stepp, Scott, Whalen, Beeney & Hipwell (2014) では, 境界例心性の強い母親を持つ青年は, 母親の感情と行動のコントロール不全の影響を受けることが示されている。

しかし, 母親の境界例心性が強いからといって, 必ずしも青年の境界例心性が強められるわけではない。Reinelt, Stopsack, Aldinger, Ulrich, Grabe & Barnow (2014) では, 母親の境界例心性とその子どもの境界例心性との相関関係はそれほど強くないことを示しており, 青年の環境的, または素因

的な要因による耐性があると考えられる。本研究では、母親の境界例心性からの影響を弱めうる青年の耐性として特にユーモアに着目した。

2. ユーモアの心理的効用と境界例心性との関連

ユーモアは、フロイトが自我の防衛機能の一つとして捉えてから、治療的にも日常においても注目されてきた。近年、ユーモアが精神的健康の維持に与える効果について関心が向けられており、ユーモアのストレス緩和効果が注目されている。ユーモアのストレス緩和効果には、認知・情動の転換によるもの、距離をつくることによるもの、対人関係を円滑にすることによるものがある（葉山・桜井, 2005）。まず、ユーモアを多く表出する人は認知的柔軟性が高く（島田・下田, 2007）、ユーモアによって不快な出来事に対する否定的な認知や情動を肯定的なものへと変換することができる。この変換によって、不快な出来事を軽く見ることが可能となり、恐怖や不安などの情動・ストレスが緩和される（Maltin & Lefcourt, 1983）。つまり、ユーモラスな人は気分の変動が激しくないということである。次に、ユーモアには自分自身と自分が直面化している問題との間に距離をつくる効果がある。距離をつくることにより、情動の変動を減らし、積極的にストレスフルな状況に向かっていくことが可能となる（Lefcourt, 1995）。また、ユーモアを表出できる人ほど自己モニタリングの程度が高いことも示されている（Turner, 1980）。さらに、ユーモアの使用によって、対人関係は円滑になる。このことは、親密さや共感を扱った研究によって実証されている（Hampes, 2001/2010; Wu, Lin, Chen & Hsueh-Chih, 2016）。また、ユーモアが他者との葛藤を軽減させる効果を有することも示されている（木野, 2000）。

Maltin, Puhlik-Doris, Larsen, Gray & Weir (2003) は Humor Styles Questionnaire (HSQ) を作成し、ユーモアを 4 つに分類した。そして、ユーモアの表出に焦点を当て、表出者の心理的健康に有益なものと同有害なものがあるとした。日本においても、上野 (1992) がユーモア全体にストレス緩和効果があるわけではないと指摘した。そして、ユーモアとは可笑しさ、面白さといった心的現象であると定義し、以下の 3 種類に分類した。第一に、自己や他者を楽しませるために表出されたユーモア刺激によって喚起される遊戯的ユーモア、次に自己や他者を攻撃するためのユーモア刺激による攻撃的ユーモア、そして自己や他者を励まし、心を落ち着かせるためのユーモア刺激による支援的ユーモアである。遊戯的ユーモアと支援的ユーモアは自己や他者に肯定的であり、攻撃的ユーモアは自己や他者に否定的であるとされている。上野 (1992) は、このうちストレス緩和効果があるのは支援的ユーモアであると示している。また、上野 (1996) は、支援的ユーモアがネガティブな出来事への耐性を媒介として、抑うつ状態を抑制することを示している。

上記のようにユーモアは、主に不安や抑うつなどとの関係から精神的健康を維持する効果が研究されている。近年では BPD や、境界例心性との関連も検討されるようになってきている。境界例心性とユーモアスタイルとの関連の研究では、Meyer, Helle, Tucker, Lengel, DeShong, Wingate & Mullins-Sweatt (2017) が Maltin ら (2003) のユーモアスタイルを用いて検討を行ったところ、青年の境界例心性は青年の支援的ユーモアと負の相関、自虐的ユーモアとは正の相関、その他二つのスタイルとは相関関係は見受けられなかったとしている。また、Schermer, Martin, Martin, Lynskey, Trull, & Vernon (2015) では青年の境界例心性と青年の支援的ユーモア、遊戯的ユーモアは負の相関、攻撃

的ユーモアと自虐的ユーモアは正の相関を示した。さらに、境界例心性と自殺企図との関連を支援的ユーモアと遊戯的ユーモア、自虐的ユーモアが緩和すると示している。このことから、青年のユーモアは、境界例心性を有する者に対して精神的に健康な効果をもっていると考えられる。また、境界例心性の強い母親から青年の境界例心性へ与える影響を媒介する青年側の要因を同定することにより、境界例心性の強い母親を有する青年に対する介入方法についてより検討しやすくなるものと考えられる。しかし、これまで境界例心性を有する母親から青年へ与える影響を、青年のユーモアが媒介するかどうかについての研究はない。さらに、青年のユーモアは、他の家族成員によって育まれている可能性が考えられる。ユーモアの形成には環境の影響があり、ユーモアが多い環境にいることでユーモアが育まれると考えられている（上野, 1992）が、それを検討したものは少ない。

3. 本研究の目的

本研究では、境界例心性を、江上（2010）の「社会的・文化的に逸脱しない範囲であるものの、対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感、衝動性、見捨てられ抑うつなどを抱く人格特性」と定義する。また、本研究でのユーモアは、上野（1992）にならい、「おかしさ」「おもしろさ」といった心的現象を示すものとする。さらに、青年のユーモアを形成したひとつの要因と考えられる、家庭環境においてどの程度のユーモアがあったかを「ユーモアのある家庭環境」とする。

そして、境界例心性の強い母親をもつ青年の耐性のひとつとしてユーモアに注目する。本研究では、母親の境界例心性から青年の境界例心性への影響を、個人内資源である青年のユーモアと、外的資源であるユーモアのある家庭環境が媒介するかについて実証的に検討し、境界例心性の強い母親を持つ青年へのより良い支援を検討する一助となることを目的とする。本研究で検討する仮説をまとめ、その仮説モデルを図1に示した。

（仮説①）母親の境界例心性は、青年の境界例心性を強める。

（仮説②）青年の遊戯的ユーモアと支援的ユーモアは、青年の境界例心性を弱める。

（仮説③）青年の攻撃的ユーモアは、青年の境界例心性を強める。

（仮説④）ユーモアのある家庭環境は、青年の遊戯的ユーモアと支援的ユーモア、攻撃的ユーモアを強める。

（仮説⑤）母親の境界例心性から青年の境界例心性への影響は、ユーモアのある家庭環境と青年のユーモアを媒介している。

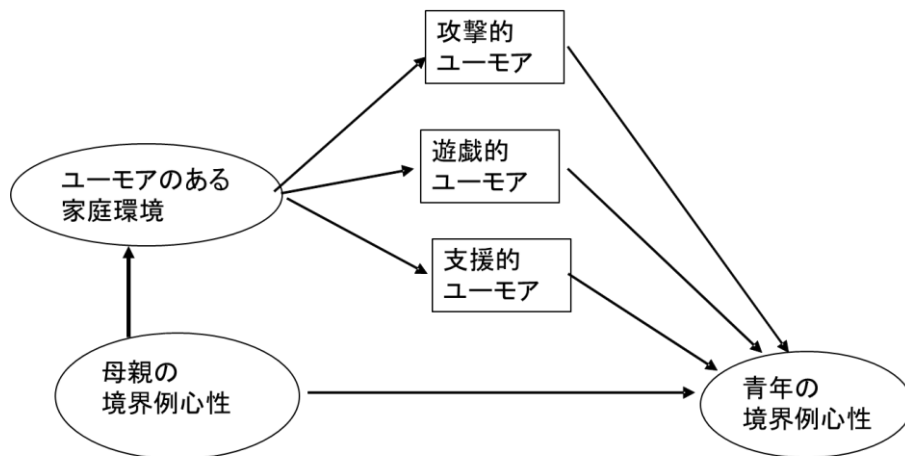


図1 境界例心性と青年のユーモアに関する仮説モデル

方法

調査対象と調査時期:男子大学生 96名, 女子大学生 251名の計 347名に対して質問紙調査を行った。調査は, 2017年 10月から 11月までであった。全回答者 347名のうち, 年齢が 26歳以上の回答者 2名は分析対象外とした。次に, 明らかに虚偽とわかる回答や, 調査項目の 3分の 1以上に回答していない回答者 21人を除いた。最終的に 324名が分析の対象となった。

調査内容:フェイスシート, ユーモアのある家庭環境, 境界例心性尺度(江上, 2011), 母親の境界例心性尺度, ユーモア志向尺度(上野, 1996)を実施した。

ユーモアのある家庭環境:友人関係尺度(岡田, 1995)を参考に独自に作成した。青年のユーモアを形成したひとつの要因と考えられる家庭環境におけるユーモアの程度を測定するための項目であり, 全 5項目である。回答者が小学校低学年までの家庭環境におけるユーモアに関して, 「全くなかった」から「よくあった」の 4件法で回答を求めた。質問項目は大学 4年生 3人と, 博士課程前期・博士課程後期の大学院生 10人, 指導教員と検討したうえで作成した。

境界例心性尺度:非臨床群の境界例心性を測定する尺度(江上, 2011)を用いた。この尺度は, 臨床群と連続する心性として境界例心性を捉える尺度である。空虚感, 感情の不安定性, 衝動性, 自己像の不安定性, 対人関係の不全, 見捨てられ抑うつ等の 6下位因子から成る。全 36項目に対して, 「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の 6件法で回答を求めた。

母親の境界例心性尺度:回答者である青年が認知した母親の境界例心性を測定するために作成した。前出の境界例心性尺度(江上, 2011)を改変して作成したものである。改変の許可はメールにて研究の概要を説明したうえで得ている。項目は「私」という記載を「自分」に置き換え, 母親についての項目として違和感のないように改変をした。回答者が幼いころ(小学校低学年まで)の母親につ

いて尋ねた。

ユーモア志向尺度：ユーモアに対する志向性を測定する尺度（上野，1996）である。ユーモアの表出や動機など一部に焦点を当てたものではなくユーモアを全体的に捉えた尺度である。攻撃的ユーモア，支援的ユーモア，遊戯的ユーモアの3下位尺度からなる。全24項目に対し、「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法により回答を求めた。

手続きと倫理的配慮：著者の所属する大学では、心理学に関する講義内に約90名に回答を求め、質問紙はその場で回収した。調査の趣旨を口頭で説明し、合意を得た。他大学においては、個別に調査協力を依頼し、口頭または文面で説明合意を得たうえで実施した。紙媒体を配布するか、ウェブ調査のURLをSNSを通じて送信した。回答は強制するものではなかった。また、回答は個人が特定されないようIDにて管理し、統計的に処理した。

結果

1. 各尺度の検討

ユーモアのある家庭環境：重みづけのない最小二乗法による因子分析を行った。固有値の減衰量やスクリープロットから1因子構造が妥当であると考えられた。共通性は.40以上、因子負荷量は.65以上の十分な値が得られた。Cronbachの α 係数を算出したところ、.823という十分な値が得られた。家庭環境においてどの程度ユーモアが用いられているかを調べるための尺度であるため、ユーモアのある家庭環境尺度とした（表1）。

境界例心性：青年の境界例心性尺度に関して、確認的因子分析を行ったところ、適合が悪かったことや、母親の境界例心性の因子構造との相違を見る必要性を鑑み、探索的因子分析を行った。青年の境界例心性36項目について、重みづけのない最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。スクリープロットの傾きから4因子構造が妥当と考えられた。共通性は0.3以上、因子負荷量は0.35以上の値が得られた。また、内的整合性は、第一因子は $\alpha=.867$ 、第二因子は $\alpha=.833$ 、第三因子は $\alpha=.821$ 、第四因子は $\alpha=.744$ であった。また、全体としては $\alpha=.916$ と十分な値が得られた。第一因子は「本当の自分がわからない」など、主に自己像の障害と考えられた。第二因子は「私には信頼

表1 ユーモアのある家庭環境尺度の因子分析結果

項目内容		共通性
母は冗談を言って家族を笑わせた	.687	.472
父は冗談を言って家族を笑わせた	.663	.439
母はその日にあった出来事を面白おかしく話した	.697	.486
父はその日にあった出来事を面白おかしく話した	.697	.486
家族でおもしろい話をして笑い合った	.740	.547

因子抽出法：重みなし最小二乗法 ($\alpha=.823$)

できる人がいる（逆転項目）」など、孤独感に関するものであった。第三因子は「物をたたきこわしたくなる」などの項目であり、主に衝動性や感情の不安定性を表していると思われた。第四因子は「多くのことのやる気がしない」など、抑うつ感を表していた。

次に、母親の境界例心性尺度について項目のまとまりを調べた。スクリープロットの傾きと、解釈可能性から、4因子構造が妥当であると判断し、重み付けのない最小二乗法・Promax 回転による因子分析を行った。結果、共通性は 0.3 以上、因子負荷量が 0.35 以上の 4 因子が抽出された。内的整合性は、第一因子は $\alpha = .860$ 、第二因子は $\alpha = .856$ 、第三因子は $\alpha = .867$ 、第四因子は $\alpha = .761$ であった。尺度全体では $\alpha = .910$ であり、十分な値を得られた。青年と母親が同構造となり、「自己不全」「衝動性」「孤独感」「抑うつ感」の 4 因子構造となった（表 2）。

青年ユーモア：青年のユーモアに関する全 24 項目について、重み付けのない最小二乗法による因子分析を行った。固有値の減衰状況やスクリープロットからも 2 因子構造が妥当であると判断した。共通性が 0.20 に満たない項目、因子負荷量が 0.35 に満たない項目を削除した。Cronbach の α 係数は、全体では $\alpha = .807$ 、第一因子は $\alpha = .801$ 、第二因子は $\alpha = .767$ と十分な値が得られた。最終的に得られた 14 項目の尺度を青年ユーモア尺度と命名した。第一因子には「友人を励ますために笑わせようとする」など、自己や他者を助け、支えるためのユーモアを示す項目が含まれている。よって、この因子は上野（1996）の支援的ユーモアと同様の内容と考え「支援的ユーモア」因子と命名した。第二因子には「笑いには多少毒があった方がおもしろい」など、他者を攻撃する項目が含まれているため、「攻撃的ユーモア」因子と命名した。結果を表 3 に示す。

2. ユーモアが境界例心性に与える影響の検討

各変数間の相関：青年の境界例心性下位因子と、母親の境界例心性下位因子は、 $r = .13 \sim .50$ の正の相関が見られた ($p < .01$)。特に、青年の自己不全は母親の自己不全と、青年の衝動性は母親の衝動性と中程度の相関を示した ($r = .50, p < .01 / r = .52, p < .01$)。

次に、青年の境界例心性と青年のユーモアに関しては、青年の孤独感と支援的ユーモアが負の弱い相関を示し ($r = -.27, p < .01$) 有意であった。また、青年の衝動性と抑うつ感は攻撃的ユーモアと正の弱い相関を示し ($r = .28, p < .01 / r = .19, p < .01$) 有意であった。母親の境界例心性と青年のユーモアに関しては、弱い相関が一部に見受けられた。母親の衝動性・抑うつ感と攻撃的ユーモアは正の弱い相関関係を示し ($r = .20, p < .01 / r = .18, p < .01$) 有意であった。また、母親の孤独感と支援的ユーモアは負の弱い相関を示し ($r = -.20, p < .01$) 有意であった。他の下位因子にはほとんど相関は見受けられなかった。また、青年の支援的ユーモアと攻撃的ユーモアは正の弱い相関が見られた ($r = .18, p < .01$)。結果を表 4 に示す。

表2 境界例心性尺度 ($\alpha = .901$)

項目内容		I	II	III	IV	共通性
因子Ⅰ 自己不全 ($\alpha = .900$)						
2-30.	いったい私は誰なのかと困ってしまう	.943	.009	.035	-.177	.676
2-23.	本当の自分分からない	.805	-.080	.123	.155	.654
2-27.	周りの人は自分の心を見透かしているのではないかと思う	.744	-.061	.076	-.076	.389
2-26.	私は自分が何かを演じているように自分を見ている	.737	-.098	.037	-.040	.407
2-9.	私の周りには何か壁があるように思う	.600	.068	-.086	.087	.490
2-32.	私はまるで霧の中に生きているようにはっきりしない	.567	.083	-.018	.011	.572
2-6.	時に私は自分自身でないと思う	.538	.005	-.066	.162	.407
2-17.	私は周囲の人や物事から見放されているような気がする	.490	.129	-.210	.060	.573
2-8.	私は孤独だと思う	.486	.119	-.076	-.047	.525
2-22.	私の周りで不幸なことが起こるのではないかと感じる	.437	.030	-.262	.119	.336
因子Ⅱ 衝動性 ($\alpha = .843$)						
2-35.	かんしゃくを起したい気分になる	-.113	.922	-.067	-.086	.732
2-36.	自分の中に爆発するような感情がある	-.012	.790	-.012	-.006	.616
2-10.	物をたたきこわしたくなる	.021	.699	.083	.110	.538
2-31.	誰かを言葉で攻撃したい気持ちになる	.076	.662	.033	-.031	.465
因子Ⅲ 孤独感 ($\alpha = .770$)						
2-21R.	私には信頼できる人がいる	.109	-.023	.849	.076	.600
2-33R.	私は真の友人をもっている	-.069	.023	.788	.173	.564
2-1R.	自分は「ひとりぼっちではない」と思うことができる	-.044	-.094	.510	-.021	.351
2-19R.	自分にも何かとりえはあると思う	.056	-.004	.483	-.271	.379
2-16R.	友人をつくるのは得意な方だ	-.006	.134	.471	-.234	.322
因子Ⅳ 抑うつ感 ($\alpha = .730$)						
2-2.	多くのことにやる気がしないとを感じる	-.108	-.045	.058	.933	.682
2-14R.	毎日の生活にはりがある	.114	.237	.138	.633	.397
2-12.	なぜやりの気持ちになる	.077	.075	.276	-.545	.624
2-18.	この先何をしたいのか私には分からない	.211	-.045	.019	.528	.430
因子間相関		I	II	III	IV	
		-	.592	-.556	.672	
			-	-.394	.427	
				-	-.452	

因子抽出法：重み付けのない最小二乗法，プロマックス回転

表3 青年ユーモア尺度 因子分析結果 ($\alpha = .807$)

項目内容	I	II	共通性
因子 I 支援的ユーモア ($\alpha = .801$)			
4-9. 友人を励ますために笑わせようとする	.777	-.088	.571
4-3. 人を救うようなユーモアが好きだ	.654	-.138	.393
4-2. もっと人を笑わせたい	.643	.135	.484
4-12. ちょっと淋しそうな人がいると冗談などを言って笑わせたい	.598	.080	.392
4-8. 人間くささのある笑い話や、ユーモアが好きだ	.574	-.057	.313
4-10. 単純でわかりやすいユーモアが好きだ	.545	-.083	.276
4-6. 人をなぐさめるために、自分の失敗をおもしろおかしく語ることがある	.472	.132	.278
4-5. 気がめいるようなときでもユーモアで自分を励ます	.394	.139	.207
因子 II 攻撃的ユーモア ($\alpha = .767$)			
4-20. ブラックユーモアが好きだ	.069	.696	.441
4-4. 笑いには多少毒があった方がおもしろい	-.140	.693	.517
4-19R. 人を傷つけるような笑いは嫌いだ	.241	-.621	.354
4-1. 過激な冗談が好きだ	.091	.594	.394
4-11. 友人を軽く皮肉ったりして楽しむことがある	.128	.529	.337
4-13. 変わっている知人の話をよく笑いのタネにする	.186	.457	.295
因子間相関			
	I	II	
	-	.300	
因子抽出法：重みなし最小二乗法, プロマックス回転	.300	-	

重回帰分析による仮説の検討：母親の境界例心性の下位因子から青年の境界例心性の下位因子への影響を検討するために、強制投入法による重回帰分析を行った。結果を表 5 に示す。VIF はすべて 10 以下であり、多重共線性は見られなかった。母親の境界例心性の下位因子から青年の境界例心性の下位因子への正の影響が明らかになった。

次に、青年のユーモアの下位因子を独立変数、青年の境界例心性の下位因子を従属変数とした重回帰分析を行った。VIF はすべて 10 以下であり、多重共線性は見られなかった。結果を表 6 に示す。支援的ユーモアは青年の境界例心性へ負の影響、攻撃的ユーモアは青年の境界例心性へ正の影響を与えていることが明らかとなった。

また、母親の境界例心性から青年のユーモアへ与える影響を検討するため、下位因子ごとに重回帰分析を行った。VIF はすべて 10 以下であり、多重共線性は見られなかった。母親の孤独感は支援的ユーモアへ負の影響 ($\beta = -.212, p < .001$) を与え、母親の衝動性と抑うつ感は正の影響 ($\beta = .171, p < .05 / \beta = .179, p < .05$) を与えていることが明らかになった。結果を表 7 に示す。

表4 各変数間の相関関係

	ユーモア のある 家庭環境		青年境界例心性		母境界例心性		青年ユーモア	
	自己不全	衝動性	孤独感	抑うつ感	自己不全	衝動性	孤独感	抑うつ感
ユーモアの ある家庭環境	-	.22**	-.12*	-.23**	-.25**	-.18**	-.36***	-.26**
自己不全			.60**	.59**	.50**	.43**	.24**	.28**
衝動性				.45**	.32**	.52**	.13*	.25**
孤独感					.31**	.28**	.37**	.30**
抑うつ感					.27**	.28**	.17**	.30**
自己不全						.50**	.39**	.65**
衝動性							.19**	.45**
孤独感								.39**
抑うつ感								
支援的ユーモア								
攻撃的ユーモア								

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表5 母親の境界例心性と青年の境界例心性 重回帰分析結果

	青年自己不全	青年衝動性	青年孤独感	青年抑うつ感
	β	β	β	β
母 自己不全	.431 ***	.099	.079	.058
母 衝動性	.261 ***	.484 ***	.153 *	.167 *
母 孤独感	.080	.017	.287 ***	.048
母 抑うつ感	-.149 *	-.039	.066	.163 *
R^2	.309 ***	.275 ***	.193 ***	.119 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ β : 偏回帰係数

表6 青年のユーモアと青年の境界例心性 重回帰分析結果

	青年自己不全	青年衝動性	青年孤独感	青年抑うつ感
	β	β	β	β
支援的ユーモア	-.115	-.084	-.309 ***	-.135 *
攻撃的ユーモア	.070	.302 ***	.128 *	.231 ***
R^2	.013	.083 ***	.088 ***	.053 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ β : 偏回帰係数

表7 母親の境界例心性と青年のユーモア 重回帰分析結果

	支援的ユーモア	攻撃的ユーモア
	β	β
母 自己不全	.061	-.063
母 衝動性	.004	.171 *
母 孤独感	-.212 ***	-.091
母 抑うつ感	-.036	.179 *
R^2	.043 *	.061 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ β : 偏回帰係数

共分散構造分析による仮説の検討：各変数間の相関関係や、因子数に変化があったことから、モデルを作成し直した。まず、青年のユーモアが先行研究とは異なり 2 因子構造となったため、モデルにおいても 2 因子に変更した。さらに、青年のユーモア間に相関がみられたため、支援的ユーモアと攻撃的ユーモアに共分散を仮定した。また、重回帰分析の結果、母親の境界例心性は青年のユーモアへ影響を与えていることが想定されたため、母親の境界例心性から支援的ユーモア、攻撃的ユーモアへのパスを仮定した。共分散構造分析において、推定値が有意でなかったパスを削除し、最終的な結果を図 2 に示す。

分析の結果、適合度は、GFI=.991, AGFI=.955, CFI=.989, RMSEA=.029 であった。これらの値から、このモデルがデータをよく説明していると判断し、採用することとした。なお、CMIN は $\chi^2=13.394$ で棄却された。次に、パス係数の結果について検討する。まず、母親の境界例心性から青年の境界例心性への影響について、有意な正の影響を示していた ($\beta=.495, p<.001$)。母親の境界例心性からユーモアのある家庭環境へ有意な負の影響を与えていた ($\beta=-.322, p<.001$)。ユーモアのある家庭環境は支援的ユーモアへ有意な正の影響を与えていた ($\beta=.330, p<.001$)。母親の境界例心性は青年の攻撃的ユーモアへ正の影響を与えていた ($\beta=.206, p<.001$)。青年の支援的ユーモアと攻撃的ユーモアは、正の相関を示していた ($r=.324, p<.001$)。

次に、青年のユーモアから青年の境界例心性への影響について述べる。支援的ユーモアは青年の孤独感へ負の影響を与えていた ($\beta=-.112, p<.05$)。また、攻撃的ユーモアは青年の境界例心性へ正の影響を与えていた ($\beta=.127, p<.05$)。

モデルの適合が確認されたため、ユーモアの媒介効果について検討した。媒介効果を検討するために、ブートストラップ法による媒介効果の検定を行った (サンプリング回数 1000, 信頼性区間 95%)。バイアスは.001~.003 と小さかったため、百分位数法により解釈した。検定の結果、有意な媒介効果が示された。ユーモア全体 (ユーモアのある家庭環境、支援的ユーモア、攻撃的ユーモア) の媒介効果は.01%で有意であった (媒介効果=.034, SE=.01, 95%CI [.01, .063])。また、攻撃的ユーモアのみの媒介効果は.023, ユーモアのある家庭環境と支援的ユーモアによる媒介効果は.012 であった。

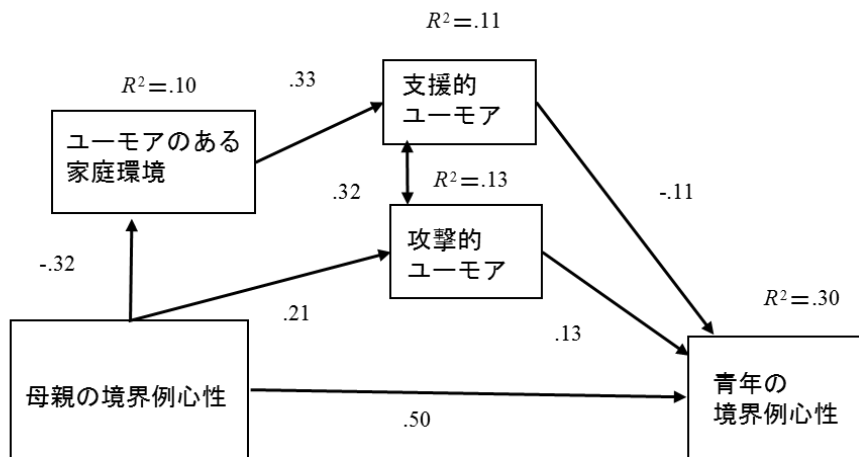


図2 共分散構造分析結果

考察

1. 母親・青年の境界例心性と青年のユーモアとの関連

母親の自己不全は青年の自己不全と、母親の衝動性は青年の衝動性と中程度の相関を示し、重回帰分析の結果 ($\beta=.431, \beta=.261$) から、母親の自己不全・衝動性は青年の自己不全・衝動性を強めることが明らかになった。Reinelt ら (2014) によると、母親の境界例心性は養育態度を媒介して青年に影響を与えており、母親の境界例心性は直接子どもに影響を与えていなかった。しかし本研究の結果、仮説① (母親の境界例心性は、青年の境界例心性を強める。) は一部支持され、母親の境界例心性から青年の境界例心性への直接の影響が示唆された。また、母親の衝動性は青年の境界例心性の4因子すべてに有意な正の影響を与えており、母親の衝動性の強さが青年の境界例心性を強めることが示された。衝動性はBPDの他の症状を誘引するとも言われており (Linehan, 1993/2007)、本研究の結果からも衝動性に焦点を当てることの重要性が改めて示唆された。これらのことから、境界例心性の強い母親を持つ青年への支援の重要性が改めて示された。

次に、青年の支援的ユーモアは青年の孤独感に負の影響を与えていた。一方、青年の攻撃的ユーモアは青年の衝動性と抑うつ感を高めており、精神的健康へマイナスの影響を与える (上野, 1992) ことが確認された。以上から、仮説② (青年の遊戯的ユーモアと支援的ユーモアは、青年の境界例心性を弱める。)、仮説③ (青年の攻撃的ユーモアは、青年の境界例心性を強める。) は支持された。Schermer ら (2015) では、肯定的なユーモアが境界例心性と負の相関関係があり、否定的なユーモアとは正の相関関係があることが示されている。本研究においても、同様の結果が示され、青年のユーモアには青年の境界例心性を弱めるものと強めるものがあることが明らかになった。

さらに、本研究では母親の境界例心性が青年のユーモアへ影響を与えていることが明らかとなった。母親の孤独感は青年の支援的ユーモアへ負の影響を与えており、母親の孤独感が弱いほど、青年の支援的ユーモアが強まることが示された。一方、母親の衝動性と抑うつ感は青年の攻撃的ユーモアへ正の影響を与え、母親の衝動性と抑うつ感が強いほど青年の攻撃的ユーモアが強まることが明らかになった。青年のユーモアが育成される要因について、現在詳細は明らかにされていないが、本研究により、母親の境界例心性が青年のユーモアへ影響を与えている可能性が示唆された。

2. 共分散構造分析による青年のユーモアの媒介効果について

共分散構造分析によって、ユーモアの媒介効果を検証した。支援的ユーモアに関しては、母親の境界例心性は直接影響を与えておらず、直接的な媒介効果は検証できなかった。しかし、ユーモアのある家庭環境を媒介しての効果があつた。一方、攻撃的ユーモアは母親の境界例心性から直接的に影響を受けて強まり、青年の境界例心性を強めており、ユーモアのある家庭環境を媒介していなかった。よって、仮説④ (ユーモアのある家庭環境は、青年の遊戯的ユーモアと支援的ユーモア、攻撃的ユーモアを強める。)、仮説⑤ (母親の境界例心性から青年の境界例心性への影響は、ユーモアのある家庭環境と青年のユーモアを媒介している。) は一部支持された。Meyer ら (2017) により、ユーモア形成の環境要因と遺伝要因の割合が検討されているが、本研究によって青年の支援的ユーモアはユーモアのある家庭環境により強められることが示された。また、母親の境界例心性が弱いほ

どユーモアのある家庭環境は強まり、ユーモアのある家庭環境が青年の支援的ユーモアを強め、それらが青年の境界例心性を弱めていることが確認された。本研究で用いた支援的ユーモアは、気分や雰囲気明るくする気分転換の役割や、平穏さや落ち着きを与える役割があると考えられる(上野, 1992)。このような役割を持つ支援的ユーモアは、家庭環境をユーモアの多い環境にすることで強められ、それによって青年の境界例心性を弱めることが明らかとなった。一方、攻撃的ユーモアは、母親の境界例心性の強さの影響を受けて強まり、青年の境界例心性を強めていた。上野(1992)は、攻撃的ユーモアは攻撃性と関連しており、対人関係に悪影響を与えている可能性があることを示している。本研究においても、青年の攻撃的ユーモアは青年の境界例心性を強めることが確認され、精神的健康に悪影響を及ぼす(Maltinら, 2003)ことが改めて示された。

さらに、ユーモアのある家庭環境と支援的ユーモアを合わせた媒介効果よりも、攻撃的ユーモアによる媒介効果の方が大きかった。このことから、支援的ユーモアやユーモアのある家庭環境を強めることよりも、攻撃的ユーモアを弱めることにより母親の境界例心性が青年の境界例心性へ与える影響をより効果的に弱めることが出来ると思われる。

以上より、母親の境界例心性から青年の境界例心性への影響を媒介する青年側の要因として、青年のユーモアがあることが明らかになった。今まで、母親の境界例心性からの影響を母親の養育態度など母親側の要因が媒介することは示されてきた(Reineltら, 2014)が、青年側の要因については注目されてこなかった。青年側の要因を特定することは、青年本人へのより有効な介入方法を考える上で重要であると思われる。つまり、母親の境界例心性が強くとも、媒介している青年の支援的ユーモアを強めることや、攻撃的ユーモアを弱めることによって青年の境界例心性の強まりを抑えることも可能であると考えられる。支援的ユーモアなどの適応的なユーモアは、青年がストレスの多い状況を乗り越えていく際に役立つものである。境界例心性の強い母親を持つ青年の支援において、不適応的なユーモアを弱め適応的なユーモアを強化することなどにより、母親の境界例心性が青年の境界例心性へ与える影響を弱め、境界例心性が強まることを抑えることも可能であると考えられる。

3. 今後の課題と展望

本研究における限界点として、母親の境界例心性を青年からの認知により測定しており、母親の境界例心性の強さにはある程度の誤差が生じていると考えられる。特に、他者からは見えにくい感情の不安定性などは実際より低く評定している可能性がある。さらに、本研究では回想法を用いており、当時の記憶を思い出せないといった限界があったと考えられる。今後は、幼少期の時点で母親本人に境界例心性に関する質問紙に回答を求めることや、子どもが幼少期の時点と青年期になった際の境界例心性を測定する縦断的な研究が必要であると考えられる。

さらに、本研究でのモデル図の説明率の低さから、友人関係など他の要因も含め検討することによって、より正確に境界例心性の強い母親を持つ青年の耐性を検討できると思われる。本研究によって、青年のユーモアが母親の境界例心性からの影響を媒介することは確認されたが、その青年のユーモアがどのように育まれていくのかは十分に検討することはできなかった。今後は、ユーモアが育まれるための要因を追加した検討を行うことにより、具体的な支援の視点を明らかに出来る

思われる。

引用文献

- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 高橋三郎, 他(監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引. 医学書院.
- 江上 奈美子 (2010). 大学生の境界例心性と親子間の家族機能認知の差異. *心理臨床学研究*, 28(5), 654-664.
- 江上 奈美子 (2011). 大学生における境界例心性がライフイベントおよび不快・快感情に及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, 20(1), 21-31.
- 古川 奈美子・北山 修 (2004). 大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性について. *九州大学心理学研究*, 5, 207-218.
- Gunderson, J.G., & Zanariti, M.C. (1987). Current overview of the borderline diagnosis. *The Journal of Clinical Psychiatry*, 48, 5-11.
- Hampes, W. P. (2001). Relation between humor and empathic concern. *Psychological Reports*, 88(1), 241-244.
- Hampes, W. P. (2010). The relation between humor styles and empathy. *Europe's Journal of Psychology*, 6(3), 34-45.
- 葉山 大地・桜井 茂男 (2005). ユーモアのストレス緩和効果に関する研究の動向. *筑波心理学研究*, 30, 87-97.
- Herr, N. R., Hammen, C. & Brennan, P. A. (2008). Maternal borderline personality disorder symptoms and adolescent psychosocial functioning. *Journal of Personality Disorders*, 22(5), 451-465.
- 木野 和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響. *心理学研究*, 70, 494-502.
- Lefcourt, H. M., Davidson, K., Shepherd, R., Phillips, M., Prkachin, K., & Mills, D. (1995). Perspective-taking humor: Accounting for stress moderation. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 14(4), 373-391.
- Linehan, M. M. (1993) *Skills training manual for treating borderline personality disorder*. 小野 和哉(訳) (2007). 弁証法的行動療法実践マニュアル——境界性パーソナリティ障害への新しいアプローチ. 金剛出版.
- Maltin, R.A. & Lefcourt, H. (1983). Sense of humor as a moderator of the relation between stressors and moods. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 1313-1324.
- Maltin, R.A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the Humor Styles Questionnaire. *Journal of Research in personality*, 37, 48-75.
- Meyer, N. A., Helle, A. C., Tucker, R. P., Lengel, G. J., DeShong, H. L., Wingate, L. R., & Mullins-Sweatt, S. N. (2017). Humor styles moderate borderline personality traits and suicide ideation. *Psychiatry*

- Research*, 249, 337-342.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. *教育心理学研究*, 43(4), 354-363.
- 大家 聡樹 (2006). 青年期の親子関係イメージと境界例心性に関する研究. *心理臨床学研究*, 24(1), 22-33.
- Reinelt, E., Stopsack, M., Aldinger, M., Ulrich, I., Grabe, H. J., & Barnow, S. (2014). Longitudinal transmission pathways of borderline personality disorder symptoms: from mother to child? *Psychopathology*, 47, 10-16.
- Schermer, J. A., Martin, R. A., Martin, N. G., Lynskey, M. T., Trull, T. J., & Vernon, P. A. (2015). Humor styles and borderline personality. *Personality and Individual Differences*, 87, 158-161.
- 重松 晴美 (2005). 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究——境界例心性を通して. *心理臨床学研究*, 22(6), 659-664.
- 島田 裕子・下田 好行 (2007). 現代家族におけるコミュニケーションのあり方に関する研究 ——ユーモアに視点をあてて. *家族教育研究*, 12, 11-20.
- 須川 聡子 (2014). 境界性パーソナリティ障害の家族研究・家族支援の概観と展望. *東京大学教育研究科紀要*, 54, 313-324.
- 杉野 要人 (2013). 境界例人格傾向を有する高年男性の事例研究——高年まで無事に表面上の生活を送る上での方略について. *人間性心理学研究*, 31(1), 31-42.
- Torgersen, S., Kringlen, E., & Cramer, V. (2001). The prevalence of personality disorders in a community sample. *Archives of general psychiatry*, 58, 590-596.
- Tragesser, S. L., Solhan, M., Schwartz-Mette, R., & Trull, T.J. (2007). The role of affective instability and impulsivity in predicting future BPD features. *Journal of Personality Disorders*, 21, 603-614.
- Trull, T. J., Ueda, D., Conforti, K., & Doan, B. T. (1997). Borderline personality disorder features in nonclinical young adults: 2. Two-year outcome. *Journal of abnormal psychology*, 106(2), 307-314.
- Turner, R. G. (1980). Self-monitoring and humor production. *Journal of Personality*, 48(2), 164-172.
- 上野 行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について. *社会心理学研究*, 7, 112-120.
- 上野 行良・宮部美樹 (1996). ユーモアの支援的効果の検討. *心理學研究*, 67(4), 270-277.
- Weiss, M., Zerkowitz, P., Feldman, R. B., Vogel, J., Heyman, M., & Paris, J. (1996). Psychopathology in offspring of mothers with borderline personality disorder——a pilot study. *The Canadian Journal of Psychiatry*, 41, 285-290.
- Wu, C. L., Lin, H. Y., & Chen, H. C. (2016). Gender differences in humor styles of young adolescents: Empathy as a mediator. *Personality and Individual Differences*, 99, 139-143.
- Zalewski, M., Stepp, S. D., Scott, L. N., Whalen, D. J., Beeney, J. F., & Hipwell, A. E. (2014). Maternal borderline personality disorder symptoms and parenting of adolescent daughters. *Journal of Personality Disorders*, 28(4), 541-554.